

群馬大学・名誉教授 山口 晴保

これまで7年間にわたって認知症にまつわる話題を取り上げてきましたが、今回が連載の最後となります。そこで、認知症の早期診断の意義を取り上げました。

「認知症一つのは治らねえ病気だんべえ。それなのに、なんで早く見つけなくっちゃあなんねんだい」「はい、おっしゃるとおりでございます。」残念ながら、認知症の根本的治療薬は未だ開発されていないので、早期に発見しても進行をとめられません。がんの早期発見とは違います。それでも、早期診断が好ましいのは理由があるからなのです。

できれば認知症の一手手前で早期診断

健常と認知症の中間段階を軽度認知障害といいます。記憶が悪くなってきていますが、まだ生活管理ができるので認知症ではない状態です。この軽度認知障害の段階ですと、運動をするなどのライフスタイルの改善で、認知症になるのを遅らせることができます。なかには健常に戻る方もいます。これが一つ目の理由です。

二つ目は、認知症を発症しても早期であれば、まだまだ自分でいろいろなことを決められるからです。例えば認知症の進行を遅らせる薬を内服するかどうかも自分で決めることができます。前号に、今使われているアルツハイマー型認知症治療薬の効果は限定的なので、85歳以上の高齢者では「内服しない」という選択肢もあることを書きました。大切なことはご家族が決めるのではなく、医師から十分な説明を受けた上で、本人が自分の意思で治療方針を自己決定することです。

三つ目は、自分の将来を自己決定できることです。アルツハイマー型認知症治療薬を内服しても、いずれは進行して、最後は自分の意思を伝えることが難しくなります。ですから、診断がついた時点で、最後をどう迎えたいかを考えて、事前指示書で自分の意思をご家族や友人に伝えておくことが大切です。



事前指示書

事前指示書は、1) リビングウィル(望まない医療処置・望む医療処置)と2) 医療に関する代理判断者の指名の二つの構成要素に分かれます。

1) リビングウィルでは、下記の①～③から一つを選択します。

①苦痛緩和を最優先とする医療処置

苦痛を取り除く医療処置は希望するが、苦痛をもたらす医療処置は希望しない。口から飲んだり食べたりは希望するが、経管栄養などの人工栄養は希望しない。救急隊も呼ばないでほしい。

②非侵襲的医療処置

上記に加えて経管栄養や点滴を希望する。救急隊は呼んでほしいが、気管内挿管はしないでほしい。

③侵襲的医療も含む医療処置

人工呼吸器などを含めて、できることはすべてやってほしい。

2) 代理判断者の指名では、将来自分で判断ができなくなったときには、医療に関して誰に判断してもらうかを事前に指名しておきます。現状では、終末期を迎えた多くの認知症の方で代理判断者が指名されていません。このため、最後は本人の意思が尊重されず、ご家族の意向で医療処置の判断が行われることが多くなります。実際、年金額が多いのでとことん医療を行って一日でも長く生かしてほしいというご家族や、介護が大変なので早く終わりにしてほしいと考える家族もおります。最も大切なことは、本人の考え方です。それを家族なり友人なり指名した代理判断者に伝え、自分が判断できなくなったときに備えておくことがとても重要です。

長生きしていると、認知症になる確率はどんどん高まります。いつ認知症になっても、自分の望む医療を受けられるので安心となるよう、元気なうちから前向きに事前指示書を書いて家族に伝えておくのがよいと思います。「事前指示書一つのはどこにあるんだい」という方、ネットで調べるか、お近くの地域包括支援センターにご相談ください。群馬県にも前橋市にも高齢者全員に事前指示書の用紙を配るとよいと提言したのですが、行政は死に関することだからと及び腰で、まだ実現していません。人間の死亡率は100%なのに。

終末期 事前指示書で 安寧に

やまぐち はるやす
山口 晴保



群馬大学・名誉教授、認知症介護研究・研修東京センター・センター長

1976年に群馬大学医学部を卒業後、群馬大学大学院博士課程修了(医学博士)。専門はアルツハイマー病の神経病理学やリハビリテーション医学(日本リハビリテーション医学会専門医)。アルツハイマー病の病態解明を目指して、脳βアミロイド沈着機序をテーマに28年にわたって研究を続けてきた。また、認知症の進行を防ぐ脳活性化リハビリテーションにも取り組んでいる。これらの研究成果を集大成し、2005年に『認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント一快一徹! 脳活性化リハビリテーションで進行を防ごう!』(協同医学出版社)を出版した。一方、群馬県地域リハビリテーション協議会委員長として群馬県の地域リハビリテーション連携システム作りを注ぎ、2006年から「介護予防サポーター」の育成を進めてきた。また、ぐんま認知症アカデミーの代表幹事として、群馬県内の認知症ケア研究の向上に尽力している。日本認知症学会副理事長、第27回日本認知症学会学術集会(2008.10、前橋)会長。